

日露青年交流センター

2018年度 日本語教師派遣事業

帰国報告書

ウラル連邦大学
(エカテリンブルグ市)

丸島 暁

1. 年間業務日程

- 2018年9月4日 着任
2018年10月27日 モスクワ国際学生日本語弁論大会
2018年12月2日 日本語能力試験（ペルミ）
2018年12月23日 前期授業最終日
2019年2月11日 後期授業開始日
2019年6月10日 後期授業最終日
2019年6月30日 契約期間満了日、離任日
2019年7月1日 インターンシップ（サマージョブ）開始日（～9月30日）
2019年7月7日 日本語能力試験（モスクワ）

ウラル連邦大学では、例年ウラル地方日本語弁論大会や東洋学科文化祭などのイベントを開催しているが、本年度は特に大きなイベントは開催されなかった。

また、大阪大学と神戸市外国語大学と提携しているため、毎年各大学に1～2名留学している。留学を希望する学生は2月末に選抜試験を受けなければならない。

インターンシップは本年度から始まった。希望者は夏休み期間を利用して、日本の旅館かホテルで就労経験を積む。本年度は石川県、長野県、北海道のホテルや旅館に2名ずつ派遣される。

2. 赴任校の概要

日：ロシア初代大統領ボリス・ニコラエヴィッチ・エリツィン記念ウラル連邦大学
ウラル人文学院

露：Уральский федеральный университет имени первого Президента России Б.Н. Ельцина, Уральский гуманитарный институт

英：Ural Federal University named after the first President of Russia B.N. Yeltsin,
Ural Institute of Humanities

1920年 ウラル国立大学が創立される。

1925年 ウラル工科大学に改称される。

1931年 ウラル工科大学の一部の学部が統合され分離し、スヴェルドロフスク国立大学として独立する。

1945年 スヴェルドロフスク国立大学がゴーリキー記念ウラル国立大学に改称される。

1965年 ウラル国立大学が現在の校舎に移転する。

1993年 ウラル国立大学に国際関係学部が設立される。

1994年 国際関係学部日本語コースが設立される。

2011年 ウラル国立工科大学と合併し、ウラル連邦大学となる。

これに伴い、ウラル国立大学のあった施設はウラル連邦大学ウラル人文学院に改称される。

《学長》

日：ヴィクトル・アナトリーヴィッチ・カクシャロフ

露：Виктор Анатольевич Кокшаров

英：Viktor Anatolievich Koksharov

《学部・学科名》

日：国際関係学部東洋学科

露：Департамент международных отношений, Кафедра востоковедения

英：Department of international relations, Oriental studies

《所在地・連絡先》

露：Свердловская область, Екатеринбург, проспект Ленина 51

英：Sverdlovskaya oblast, Yekaterinburg, Leninsky prospekt 51

・電話 / ファックス番号: +7 (343)389-94-27 e-mail : kafedra_vostok@mail.ru

《日本語コース責任者および受入担当者》

日：アンナ・アレクサンドラヴナ・ブラコヴァ（役職：主任教師）

露：Анна Александровна Буракова

英：Anna Aleksandrovna Burakova

・電話 / ファックス番号: +7 (343)389-94-27 e-mail : kafedra_vostok@mail.ru

《日本語コースカリキュラム》

ウラル連邦大学ウラル人文学院（以下「本学」という）では国際関係学部で日本語教育が実施されており、国際関係学部東洋学科に入学した学生たちは日本語の他に、ロシア語、中国語、トルコ語、アラビア語の中から外国語を選択する。そして、選択した外国語が話される国や地域の研究が学位修得の大きなテーマになる。

そのため、それらの地域の文化や伝統、そしてそこに住んでいる人たちの精神性の理解や、研究に必要な情報収集のために外国語を履修するので、通訳者や翻訳者の育成といった実務的な面は強調されない。

本学は外国語大学ではなく、国際関係学部は語学の専門学部というわけではないが、エカテリンブルグには外国語大学がないため、この地域で日本語やその他の外国語を学びたい若者たちの受け皿となっており、本学は実質的にウラル地方全体の日本語教育の先導的な役割を担っている。また、学生たちは世界史、東洋史、哲学、地理なども履修する。

日本語を学ぶ学生たちのカリキュラムについてだが、派遣教師とロシア人教師がそれぞれの学年の授業を受け持つ。本年度、私は学士課程 1 年生と、修士課程 2 年生の授業

は受け持たなかった。

授業内容についてだが、話すことや書くことなど、アウトプットに重点を置くように指示を受けたことはあったが、それ以外に学部から授業内容や使用教科書を指定されるようなことはなかったため、私の裁量で授業を行った。

各学年の学生数と、JLPT の合格者数は下の表の通りである。

	学士課程 2 年生	学士課程 3 年生	学士課程 4 年生	修士課程 4 年	合計
概ねの日本語能力	N5～N4	N4～N3	N3	N3	
学生数 (かっこの数字は 長期留学経験者)	13 (0)	14 (2)	8 (2)	7 (1)	42 (5)
うち N3 以上の JLPT 合格者	0	N3 : 3(1) N2 : 1(1)	N3 : 1(1) N2 : 1(1)	N3 : 1(0) N2 : 2(1)	N3 : 5(2) N2 : 4(3) N1 : 0(0)

※JLPT 合格者数は 2019 年 6 月の人数。

《日本語教員数》

専任で日本語教員として勤務しているのは、私を含めて 3 名だが、学部の秘書も学士課程 1 年生の授業を担当している。また、日本人教師は派遣教師のみである。

《日本語履修学生の進路》

私が把握している限りでは、修士課程 2 年生で日本への長期留学を経験した女子学生が 1 名、文部科学省の国費留学試験に合格したため、9 月から研究生として日本の大学で学ぶ。

学士課程 4 年生だが、大半が修士課程に進学する。また、モスクワ国際学生日本語弁論大会で 2 位入賞を果たした男子学生が 1 名、成績優秀者として学内の留学生選抜試験免除で、提携校である大阪大学へ 10 か月間留学することが決まっている。この学生は帰国後、本学の修士課程に進学しなければならない。

そして女子学生が 1 名、JET プログラムの試験に合格し、9 月から秋田市で国際交流員 (CIR) として働くことが内定している。

《日本語教育業務》

授業は 1 時限 90 分で、私が受け持った週あたりの時限数は下記の通りである。

【前期】

・ 学士課程

2 年生 : 1 時限 3 年生 : 1 時限 4 年生 : 2 時限

・修士課程

1年生：2時限

【後期】

・学士課程

2年生：1時限 3年生：1時限 4年生：2時限

・修士課程

1年生：1時限

《授業内容》

教材は日本語教科書や練習問題、インターネットの情報などを参考にして自作でプリントを作成し、それを配布して授業を行うことが多かった。

また、受け持った授業数が少なかつたため、漢字を授業で扱うことはできなかった。

《教材・活動》

※授業や教材作成の際に用いた主な参考文献

『みんなの日本語第2版初級Ⅰ・Ⅱ』スリーエーネットワーク

『中級を学ぼう—日本語の文型と表現 56 中級前期』スリーエーネットワーク

『日本語の教え方 ABC』寺田和子他著、アルク

『日本語文法ハンドブック初級・中上級』松岡弘監修、スリーエーネットワーク

『日本語表現文型事典』友松悦子他著、アルク

『初級日本語文法総まとめポイント 20』友松悦子他著、スリーエーネットワーク

『中級日本語文法要点整理ポイント 20』友松悦子他著、スリーエーネットワーク

『新明解国語辞典』山田忠雄他編、三省堂

『文章は接続詞で決まる』石黒圭著、光文社

《評価》

前期は修士課程1年生、学士課程4年生および3年生の学生に対して合否試験を行った。修士課程1年生は手紙の執筆と質疑応答を中心とした口述試験を実施した。

学士課程4年生および3年生は口述による質疑応答を行い、私の質問に対して過不足なく受け答えできるかどうかを審査した。

後期は学士課程4年生のみ試験を行った。この試験は学生たちが執筆した卒業論文の概要について、日本語で PowerPoint を使いながらプレゼンテーションをして、発表後に質疑応答を行うという内容だった。

《各学年についての概要》

★修士課程 1 年生

1名日本へ長期留学していた女子学生がおり、その学生が突出して日本語能力が高かった。また、他の学生も長い期間日本語を勉強してきたので、ある程度の日本語能力は有している。

修士課程は研究や論文執筆が重要な課題になると思ったので、読解やアウトプットの課題として手紙や作文の執筆に力を入れたが、思うような結果は得られなかった。

理由としては、学生たちの出席状況が必ずしも良好だったわけではなかったため、日をまたぐ授業を行いにくかったこと、学生のニーズは読解や作文よりも会話や聴解にあったこと、学生たちには論文執筆と日本語の授業は全くの別物という意識があったことなどが挙げられる。

具体的には敬語を使って前任者か前々任者に手紙かビデオメッセージを送ろうという授業を行ったが、上手くいかなかった。敬語というテーマはとてども1回の授業で収めることができず、さらに学生は毎授業に必ずしも欠かさず出席するというわけではなかったため、学生たちはまとまった形で敬語を理解することができず、実際に何か文章を書こうとしても形にならなかった。

結果として、真剣に日本語を学ぶ、というより「日本語に触れる」という意識で、学生が持ってきた日本の映画を見たり、動画サイト（文化庁が制作した『ことば食堂へようこそ！』など）などを利用しながら授業を行うようにした。

★学士課程 4 年生

日本への長期留学経験のある学生が2名在籍していた。

授業は最初にアウトプットを兼ねて修士課程1年生と同様に、前任者か前々任者に敬語で手紙を書くという課題を実施したが、あまりいい結果は得られなかった。その後、学生の希望もあり、日本の映画を見て感想文を書いてもらった。

後期はロシア人教師から「5月末に4年生には試験があり、卒業論文の内容を日本語でプレゼンテーションをしなければならないので、作文の授業を行って欲しい」との指示があった。そこで、日本語能力試験対策も兼ねて、文章執筆に必要な接続詞を導入し、その接続詞を用いながら、日本語で作文を書くことができるようになることを目標に授業を進めた。

★学士課程 3 年生

大阪大学に留学していた女子学生が2名いたが、本来であれば学士課程4年生が同級生なので、このグループにやや居心地の悪さを感じていたようだったが、他の学生と比較すると日本語能力のみならず、学習意欲も非常に高かった。また、留学経験がない学生の中にも、日本語能力試験のN3レベルに合格した学生が2名いた。

前期は主に会話の練習を行った（「どうして日本語の勉強をしているのか」「出身地について」など、日本人と会話をしているときに、高い頻度で聞かれることが予想される質問の答えを考えて、答える）。また、国際関係学部ということで日露間の出来事をトピックにしたニュース番組を見て、感想を述べ合った。

後期は学部4年生と同様に、接続詞を使って文章を書く練習や、日本語弁論大会のテキスト執筆に役立つ表現（ことわざやレトリックなど）を扱った。

★学士課程 2年生

1年次に日本人教師の授業がなかったため、本年度初めて日本人教師の授業を受けた。

全ての学生が大学に入学してから日本語の学習を始めたため、日本人との会話経験が豊富な学生や、長期間日本に滞在したことのある学生はおらず、性格も内気で控えめな学生が多いという印象を受けたが、日本語学習意欲は高かった。

しかし、学生たちが横一線で日本語の学習を始めたこのグループも、3年生になると学生たちの間に日本語能力や意欲の面で、個人差が如実に現れてくることが予想される。

前期は主に会話の応答練習、後期は受身形（直接受身、持ち主の受身、間接受身）→使役形（強制・許可・命令・世話の用法、誘発・感情動詞）→使役受身→テ形の用法（「～てみる」「～てしまう」「～てある」など）について学習した。

《課外指導》

★モスクワ国際学生日本語弁論大会対策

毎年10月にモスクワで開催されている国際学生日本語弁論大会に学生を参加させ、かつ結果を残すために対策を練り、指導を行った。

エカテリンブルグの学生がモスクワ国際学生日本語弁論大会に出場するには、国際交流基金が実施しているビデオ審査に応募して、審査を通過しなければならない。

本学からは、2018年3月に開催されたウラル地方日本語弁論大会で2位に入賞した学生がビデオ審査に応募することになったが、9月半ばが応募の締め切り日だったため、着任早々取り急ぎテキスト執筆と発音指導を行った。

この学生は無事ビデオ審査を通過し、モスクワで2位入賞を果たした。

★文部科学省国費留学試験面接対策

2019年3月にモスクワの日本大使館で開催された、文部科学省の日研究生試験を受験した学生1名に対し、面接指導を行った。

★夏期インターンシップ参加希望者に対する履歴書執筆とPRビデオ制作指導

夏期インターンシップに参加を希望する学生は、履歴書とPRビデオを人材派遣会社に提出しなければならない。学生の受け入れを希望する宿泊施設は、この2つを判断材

料にして学生の受け入れを決定する。

本年度は6名の学生に対して履歴書の書き方を指導し、PRビデオのテキスト添削および、発音指導を行った。

ロシア以外の国の学生とも競合することになったが、全員受け入れ先が決まった。

《反省点と今後の展望》

本学では日本の提携校への長期留学制度があるので、高いレベルで日本語を習得した学生や、将来日本語を使う仕事に就きたい学生は在学中に日本へ留学することが大きな目的になる。そして、来年度から選抜試験の受験条件が日本語能力試験N3合格以上になったため、留学を希望する学生は日本語能力試験を受けなければならない。

本年度の留学選抜試験において、N3以上の合格実績は選考の優遇条件だったが、N3以上に合格した学生は2名しかいなかったため、ほぼ自動的に留学候補者が決まった。私が推薦したかった学生も、日本語能力試験の合格実績がなかったため留学の機会を逃してしまった。

留学生選抜試験にしても、昨年9月の段階で試験のことがわかっていたなら、学生たちに日本語能力試験の受験を促すこともできたが、選抜試験の内容については2月になるまでわからなかった。結果として、能力があるのにも関わらず、12月にペルミへ行く手間を惜しんだ学生が残念な思いをすることになった。もし受験していれば、N3レベルであればほとんどの学生が合格できたのではないかと思う。

今後は学生たちには1年生の段階から、当面の目標としてN3レベル合格を目指して日本語学習に励むようにしっかりと伝え、指導する必要がある。

一方で、学士課程2年生の数名は7月にモスクワに日本語能力試験を受けに行く。まずはN4を受けて、3年次にN3に合格するのが目的だが、現在学士課程3年生以上の学生で、日本語能力試験合格者が留学経験者以外ほとんどいない状況を考えると、これはいい兆候であると言えるだろう。

また、本年度から夏休みを利用した日本でのインターンシップも開始される。本学の国際関係学部は外国語の専門学部ではないので、日本語の授業時限数は限られている。そのため、学校行事を充実させて、学生の日本語学習のモチベーションを高める方法は効果的だと思う。そして、ウラル地方日本語弁論大会を毎年安定して開催できるような体制を、早く整えることも重要だと思われる。

4. その他の業務

★サマージョブ（夏期インターンシップ）の実施

日本の人材派遣会社と接点を持ったので、この会社の社長を大学にお招きし、大学上層部を説得して業務提携を結んだ。これによって夏休みに学生たちは、日本のホテルか旅館で行われるインターンシップに参加できることになった。

そして、入国管理局提出資料の日本語翻訳や取りまとめ、および人材派遣会社とのやり取りも私が中心となって行った。

★提携校への留学生選抜試験

2月の末に行われた。留学を希望する学生は自己PRビデオを撮影し、ロシア人教師2名と私にメールにて送付した。このビデオおよび、普段の学習態度、日本語能力試験の合格実績などを考慮して、留学候補者を2名選出した。

★日本語翻訳コンテストへの協力

現地の通訳協会が毎年4月に実施している翻訳コンテストに、審査員として協力した。これは日本語で書かれた新聞記事をロシア語に翻訳するという大会で、私は日本語が正しくロシア語に訳されているかチェックし、最も翻訳が的確な参加者を選出した。

5. 青年交流

★将棋講習会

後期から、民間の日本語学校である夢センターにおいて、毎週月曜日に将棋講習会を開き、希望者に将棋を指導した。

★麻雀クラブ

エカテリンブルグの麻雀クラブ（日本式ルール）の一員となり、エカテリンブルグのみならず、ペルミやノヴォシビルスクなど近隣の都市の大会にも出場し、各都市のプレイヤーたちとも親睦を深めた。

6. 任地の生活事情

《電気・水・温水》

電気については特に問題はなかったが、お湯は5月の末に2日ほど止まった。飲み水は寮1階に設置されている水の自動販売機で1リットル4ルーブルで購入できた。

《衣・食・住》

衣服に関しては、全て日本から持ち込んだもので間に合わせる事ができた。

食事については自炊せずに、外食で済ませることが多かったが特に問題はなかった。

住居については、街の中心部にほど近い大学寮の一室に住んでいた。大学までバスで20分ほどの距離にあり、快適な毎日を過ごすことができた。

《物価》

公共交通機関の運賃は一律 28 ルーブルであった。物価は全体的に日本より若干安いという印象である。

《治安》

特に身の危険を感じることはなかった。

7. 終わりに

ロシアの大学で日本語を履修し、在学中に留学など経験して日本語能力試験 N2 レベル以上に達した学生の多くは、卒業後日本に滞在するため、在外公館が実施している国費留学試験（研究生）の受験を目指す傾向が強い。本学で長期留学を経験した学生たちも同様である。ただ、国費留学試験の合格が最良の選択肢の一つであったとしても、本学の学生には他には選択肢がないというのが実情である。このあたりは日系企業や、日本と関係を持つ会社や機関が多い首都圏の学生とは、事情がやや異なると思う。

本年度は縁あって日本の人材派遣会社から旅館やホテルの求人情報を得ることができたが、本学で実用レベルの日本語能力を有している学生たち、すなわち長期留学経験のある学生たちは、上述の通り国費留学試験や JET プログラムといった公的な事業に関心を持っていたので、地方都市の旅館やホテルには興味を示さなかった。

一方で、留学経験はないがそれなりに日本語が話せる学生たちは、宿泊業への就職に興味を示したが、ほとんどの学生が日本語能力試験の合格実績がなかったため、日本に就職することは叶わなかった。人材派遣会社の情報だと、N3 以上に合格していないと入国審査に通らないとのことである。

この 1 年を振り返ると、インターン実施に伴う事務作業や人材派遣会社との折衝が、私の最も大きな仕事となった。そのため、本来であれば派遣教師が関わるのが難しい学生の卒業後の進路について考えたり、教員や学生たちと話し合う機会が多かった。そして、本学で日本語能力が高い学生は留学経験者であり、逆に留学経験のない学生たちはほとんど N3 レベルにも合格していないという二極構造が明らかになった。

私見ではあるが、今後は多くの学生に、N3 レベルに合格できる日本語能力を身に付けさせることが課題である。N3 レベルに合格した学生は一つ上のステップに進むことができるが、真面目に勉強している学生にとって、これは決して難しい目標ではないだろう。

願わくば、今後 1 人でも多くの本学の在校生や卒業生が、大学や日本で学んだ日本語を駆使し、社会で活躍することを期待したい。そして近い将来、そのような若い人たちと日本で会える日を楽しみにしている。

以上